

[001] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10287>

出版情報：語文研究. 1, 1951-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



われわれは研究発表の機会に恵まれてゐない。これは何れも九大国文学会員に限つた事ではない。地方に住む学徒に付きまとい大きな損失である。東京が研究発表の機会に四恵まれてゐるとすれば、京阪地方は二の割合である。福岡は多く見積つても一以上はない。この頃のやうに、業績業績といつて、表面に表はれた著書や論文の数量がその人の学力査定標準の最も重要な要素となつてゐる現実においては、発表の機会に恵まれないといふ事は、放置し得ない損失である。終戦後の混乱虚脱の状態から覚醒し平静をとり戻すにつれ、九大国文学会員の間に研究機関誌発行の声が次第に高まつて来たのも当然である。そこで前任の小島吉雄先生が中心となられて研究雑誌発行の具体案が作成され、それを実行する事に決定した事は、すでに御承知の通りである。

しかしながら、いよいよ実行に移ると、雑誌の創刊には生みの悩みともいふべきいろいろと面倒な事が起こる。それに編輯員の怠慢、不慎のために発刊が遅れた事は深くお詫びする次第であるが、この点何卒諒承せられたい。

原稿は意外に多く集まつた。これは全く会員の研究意欲が旺盛である事を如実に示すものであつて、九大国文学会員として編輯者として、まことに尤もなこぼしでありである。寄せられた原稿は、いづれ劣らぬ精進の結果でそれぞれ長所がある。できることなら、すべて掲載したいといふのが、編輯者の偽りない気持ちであるが、研究雑誌であるので、取捨選択しないわけにはいかぬ。また雑誌発行にはつきもの経営の面がある。純粹の研究雑誌であり、その上特定の会員に制限されてゐるのやうな事情のために、論文の長さや雑誌の紙数の制限、論文の取捨選擇といふ事は、現状においては、残念ながら不可避の事実である。この事実を幾分でも緩和するには、すべての会員の物心両方面における一層の御援助と快心の力作を寄せられる事に期待するほかはない。敢へて申せば、九大国文学会の会員である以上、少くとも購読者にはなつていただきたい、周囲の同学の士にも購読を勧めたい。力作中の力作を寄せていただきたい。

論文には、多少の瑕瑾はあつても、この事だけは自分のものだといふ自信を以つて述べられたところがなくてはならない。対象を、資料を自分自身のまなこで科学的に凝視し、考察した結果に基づいて記述されてゐる事が何より大切である。研究対象を既知の方法論やイズムや知識の鑄型に公式的に流し込んで出来上つたものは、少くとも最良の論文とは言へない。論文は細工ではなくて創造である。創造といふ点において、論文は芸術作品と相通する。最良の論文は、あらゆる科学的批判に堪へ得る創作である。そこに学徒の研究の苦しみと楽しみがあり、単なるディレクタントの楽しみと異なるものがある。

会員の中から希望もあつて、次号から九大文学部及び教養部の国文学科の現教官、旧教官の諸先生にも原稿をお願ひして御援助を乞ふ事にした。これは新なる前進に備へると共に、会員の周囲の同学の士に一人でも多くお

勧めたい。諸先生及び会員諸氏の御援助をお願ひする。

雑誌創刊については小島吉雄先生には物心両方面において多大の御援助をいただいた。阪大へ御転任後も何かと御指導と御援助を賜つてゐる。春日政治先生には、編輯会議、応募原稿の閲読等何かと御指導し御援助をいただいた。名古屋の高木市之助先生からはいらばるる激励の言葉をいただいた。教養部の諸先生も御援助なされた事である。福岡及びその附近に御在任中の国文学会員、国文学科研究室員、幹事の学生諸君等には編輯会議や事務の上でいろいろと御骨折をいただいた。また会員の方々から、手紙や口頭で激励の言葉や好意に満ちた有益な御意見をいただいた。諸先生及び会員諸氏に心から感謝の意を表した。

また、永田書店主永田虎三氏が營利を度外視して、このやうな研究雑誌の発行を快諾された御好意と会員藤野邦雄氏が書店と九大国文学会との交渉を一手に引受けられて順調に事を運んで下さつたお骨折に對し深く感謝してゐる次第である。

誌名「語文研究」は編輯會議において多くの候補誌名中最高點を得たもので、題字は春日政治先生の御揮毫である。第二回の原稿締切は昭和廿六年四月末日、紙数は四百字詰二十五枚以内を厳守されたい。一回だけで一応まとまつた原稿である事が望ましい。なるべく多くの会員の原稿を載せたいのである。発刊が予定より後れて御迷惑をかけ相済みない次第であるが、諸先生や会員諸氏の御指導と御援助により、創刊の運びに至つた事ばまことに同慶の至りである。

思ひつくままに雑然と並べたてて編輯後記とした。大方の寛恕をお願ひする。